鳴き砂

――作品概要

岩崎可奈

「わたし」由布子は、二十七歳。京都高瀬川沿いの甘味処「高瀬川」の店長をしている。その春、店長になって二度目の桜の季節を迎えようとしている。急に来られなくなったアルバイトの代わりに、二つ年下の恋人の隆に店を手伝ってもらうことになった。

隆は手際よく働き、店の商品である「桜のクリームのロールケーキ」を買って帰った。高瀬川沿いは桜並木が続く。由布子は、隆と一緒に桜を見たいと思うが、なぜか彼はそっけない。その夜隆は由布子のマンションに初めて泊まり、二人はそこで結ばれる。隆の優しさに喜びを感じる由布子だったが、マンションの窓から見える桜を一緒に見ようと隆を誘ったとき、彼の態度が冷たいことに淋しさを感じ、隆にその気持ちをぶつけると、隆はこう言った。

「俺、桜なんてそんなに見たいと思わへん。駐屯地にいっぱい咲いているから……」

陸上自衛隊の隊員である隆は、桜を見飽きるほど見ていたのだと、由布子は思った。

由布子と隆は身を寄せ合い、お互いの身の上を語り合う。

隆は、中学の時に父を失い、母と妹を守らねばと思ってきたという。工場の経営者だった父の苦労を見てきた隆は、つぶれる心配のない公務員になったのだと話す。

一方由布子は、一人っ子で、両親が不仲な家庭に育った。由布子の胸には、唯一自分をかわいがってくれた家政婦のサキさんの思い出が今でも残っている。サキさんは京都府の日本海側網野町にある琴引浜の出身だった。その浜の砂は、踏むとキュキュと音がするのだという。二人は琴引浜を訪れる約束をして、床に就いた。まどろむ隆に由布子は言う。

「戦争には行かんとってな」

隆が演習から帰ってくると、二人は琴引浜に出かけた。途中で鳴き砂の入ったビンのネックレスをお揃いで買い、浜へ向かった。琴引浜は美しかった。二人は鳴き砂を鳴らし、はしゃぐ。隆は、二年前のロシアのタンカーナホトカ号の重油流出事故の際、日本海に派遣されていて、一回きれいになった日本海を見てみたかったのだと話す。隆は、今年で陸士の任期を終えること、これからの進路について迷っていることを由布子に話す。隆が消防士を第一志望として受験していたことを聞いた由布子は、もう一度消防士を受験することを勧める。由布子の胸には、隆が兵士として戦争に行くことへの不安があったのだ。

由布子は、家政婦のサキさんが「戦争のことは思い出したくもない」と言っていたことなどを思い出していた。また、能登の鳴き砂の伝説を隆に話した。帰らない男を思って泣く女の声が鳴き砂になったのだという伝説だ。隆はそんな由布子を温かく見つめながら、由布子の言うとおり、もう一度消防士を受けてみようと決意する。

それから二年後、二〇〇一年の四月。隆は由布子のマンションでくつろいでいる。隆は任期制の陸士から終身雇用の陸曹になって、新人隊員を教育する部署に配属されている。消防士の試験を受けたのだが、だめだったのだ。隆が「自衛隊でやっていく」と言ったとき由布子は反対しなかったが、隆に、

「戦争が起こったらどうするの?」

と聞かずにはいられなかった。二人は結局、

「戦争なんて起こらへんって」

という結論に達した。由布子は、隆との関係にそれほどの心細さは感じなかったが、時々、隆との子供をもうける幻を見て、心が焦るのだった。

九月に入ってもまだ暑い朝、由布子は、出勤途中に奇妙な感覚に襲われる。店に付くと、常連客の滝さんから、二〇〇一年九月十二日の新聞を見せられる。ニューヨークのビルに飛行機が突っ込む写真を見て、由布子は呆然とする。アメリカがアフガニスタンに派兵することが決まり、その約一か月後、海上自衛隊が派遣されることが決まる。インド洋で米軍などの艦船に洋上補給するというのが、任務だった。由布子は、隆を心配してメールを送るが、隆は、今回陸が動くという話にはなっていないので心配しないでと返信してくる。久しぶりにやってきた隆に、由布子は心配してあれこれ尋ねるが、隆はあいまいにしか答えない。由布子は不安が募り、本や週刊誌を読み漁り、世界情勢を理解しようと必死になる。隆にもそんな不安を訴え続けるうちに、隆はだんだんやって来なくなり、久しぶりに来ても、由布子の視線を避けるようなそぶりをみせる。

二〇〇二年の年が明けてしばらくして、由布子は隆からメールで喫茶店に呼び出される。由布子は、テレビの討論番組で聞いた話をする。

「九・一一は世界が変わった日やって。これから自衛隊もどんどんあぶない任務になってゆくんちゃうかって……」

「……俺らは行け言われたら行くしかない」

由布子には憲法九条もどうなるか分からないという不安もある。それに対して隆は、由布子が心配して連絡しすぎるのも困ると言う。また、世の中がこうなったからといって、自衛隊を辞めるのはいやだと言う。話し合いは決裂し、由布子は、自分が振られたのだと思うしかなかった。由布子は、隆を忘れる努力をしたが、ニュースで自衛隊の報道を観ると、隆のことを思い出すのだった。

それから三年近くの時が経つ。由布子は子宮内膜症という病気にかかり、職を失い、一人、マンションで寝込んでいた。友達のはげましで何とか前向きになるように努力しはじめる。南座にまねきが上がる二〇〇四年十一月末、由布子はアロ

ママッサージを受けるため、三条大橋を渡る。河川敷のイラク反戦集会に遭遇し、その集会の人々のなかの一人が「自衛隊は悪魔」とする詩を朗読する。その詩人と言い合いになった由布子は、マンションに帰って泣く。そして（隆に会いたい）という気持ちが抑えきれず、隆に電話をかける。折り返し、隆から電話が入る。演習から帰ったばかりで、明日なら由布子のマンションへ行けるという。由布子の胸は弾む。

久しぶりに見る隆は、昔とそれほど変わっていない。二人は一緒に食事をし、睦みあう。由布子は昔、琴引浜で買った鳴き砂の入ったビンのネックレスをして、隆に見せる。由布子はクリスマスも一緒に過ごそうと言うが、隆の態度は怪しい。女の勘で、他の女の影を感じた由布子が問い詰めると、隆は、先輩の家のクリスマスパーティーに呼ばれているという。その先輩の妹に告白しようかと思っているという。

由布子の胸は、隆に対する憤りと侮蔑とでいっぱいになり、鳴き砂の入ったビンを踏んで壊し、隆に殴りかかる。由布子は隆がテレビを観ているのに気付く。由布子がテレビの画面に目を移すと、画面には炎の上がったイラクの戦場が映し出されていた。自爆テロ、米軍の誤爆、クラスター爆弾の犠牲になった子供……。由布子は言葉を失い、そこに座り込む。その横で隆は、ビンからこぼれた鳴き砂を拾っている。

二人は布団を二組敷いて横になった。由布子は、まず隆にイラク派遣のことを聞いた。隆はイラクに行くかどうかまだ分からないと言う。隆は由布子に、イラク派遣に反対しているのかと問う。由布子は、日本がアメリカに言われて兵を出すことは間違っていると思うと答える。そんな由布子に、自衛隊はイラクの人のために行くのだと答える。

由布子は、次に先輩の妹のことを隆に聞いた。隆は本気だと言う。なぜ私のところに来たのかと問い詰める由布子に、隆は、演習と演習の休みで、今日しか女に会える日はなかったのだと答える。先輩の妹にはうかつなことはできないとも言う。隆は演習の厳しさを由布子に訴える。由布子は自衛隊の激務が隆を変えたように思い、隆に自衛隊を辞めてほしいと訴える。由布子はまた、世界を覆う戦争の悲しみを思い、涙を流す。

そんな由布子に対して、隆は、自分も思いつめることはあると言う。そして、隆は、自衛隊に伝わる砂にまつわる怪談を語る。旧軍兵士の魂が宿った砂に祟られるという話だ。戦後こんなに時が経っても、まだ戦っている兵士の魂を思い、隆は涙を流す。由布子はそんな隆を抱きしめていた。

「クリスマスまで考えさせてくれ」

隆は、先輩の妹を選び、自衛隊に残るのか、由布子を選び、他の仕事を探すか、もう一度考えたいと言う。

イブの昼下がり、由布子は隆からの長い手紙を受け取るそこには、隆が出した結論が書かれてあった。

鳴き砂を琴引浜に返したこと。戦争は大嫌いだが、その戦争から大切な人を守る自分たちのような仕事は必要だと思うこと、自分は先輩の妹を選び、自衛隊に残る決意をしたこと……。

手紙を読んだ由布子は、涙を流すが、自分もまた、新しい人生を歩まねばならないと思う。

実家に帰った由布子は、近所のおばさんからサキさんの連絡先を聞く。サキさんは、琴引浜にある親戚の民宿で働いていたという。その民宿に連絡を取ると、サキさんはもう亡くなっているという。せめて仏壇の前で手を合わせたいと思い、由布子は、鳴き砂を持って、琴引浜を訪れる。鳴き砂を浜に返してから、サキさんの親戚の家を訪ね、サキさんの仏壇の前で手を合わせる。そしてサキさんの姪から、サキさんのご主人が戦死していたことを教えられる。

「戦争のことは思い出したくもない」

というサキさんの言葉の意味が分かったと由布子は思う。由布子はサキさんのお墓にお参りし、自分の病気が治ること、隆が無事であることをお願いする。

追悼　竹内和夫さん

石井亮一

あなたと出会ったのは、あなたが竜野市の教師をしているとき、兵教組の日中友好の船に乗り組んだ時からでした。その船旅は行き帰りとも台風に出合い散々な目にあったが、その嵐を乗り越え御互いの連帯が生まれましたね。

このことが遠因で、エルマール文学賞を立ち上げようと同人誌の皆さんが相談した時、竹内さんは、私に「理事長になれ」と言ってどうしても譲らなかった。私は「門外漢だからお断りする」と言ったが、「同人誌の者ばかりで理事会をつくったのでは組織的な運営が出来ない」と私を説得しかかった、それでも私が断ると「任命する」と言ったので、これには私は参って受けざるを得ませんでした。副理事長である竹内さんと相談して「賞の財政基盤の確立と、県・神戸市やマスコミにエルマールの売り込みを石井がする、理事会は定例とし、合議制で竹内さんが事務局長的な役割で運営する」と話し合った。このようにして、今日のエルマール文学賞の運営の基盤が作れました。

竹内さんの功績は大きなものがあります。竹内さんは同人誌のリーダー的役割を見事に果たされました。同時にあなたは優れた作家であると思います。とりわけあなたの代表作「孵化」は学校教育をテーマとしたものですが、教師であるあなたが学校教育を客体化して、その「矛盾」や「歪み」のなかで葛藤する教師像を見事に描き出しているのに感心しました。さすが芥川賞候補作家であると思いました。

竹内さん、あなたが中心となって創ったエルマール文学賞は、今後とも同人雑誌に拠る作家の活動に光を当て続けるでしょう。

竹内さんのご冥福を祈ります。

二〇一七年九月二十四日

竹内和夫さんお別れ会

（竹内和夫氏・二〇一七年六月十八日午後四時六分死去。八十三歳。）